天台智顗における十二因縁観の一考察

――刹那縁起の解釈をめぐって――

山内寛久

新田雅章博士は『天台実相論の研究』の中「実相と縁起の思想」と題する項目において、天台智顗の縁起観を考察し、いわゆる刹那縁起の扱いをめぐって、『法華玄義』と『摩訶止観』との間にズレがあることを指摘している。刹那縁起とは、妙楽湛然が『法華玄義釈籤』に「一刹那を釈すれば、倶舎にまた連縛等の四をいう。[1] 刹那はその一つなり」[2]、と示しているように、アビダルマの仏教において、一定のきまった形として整理された、分位縁起、刹那縁起、連縛縁起、遠続縁起の四種の縁起の一つをいう。この四種縁起の内容を大まかに識別して説くと、分位縁起・連縛縁起・遠続縁起の三種の縁起は時間的、継起的な生起、滅の因果の関係にスポットを当ててみた縁起観（因果縁起）である（性起説）のに対して、刹那縁起は空間的、論理的、存在論的に互いに相い依りあって成り立っている、という相互の縁にスポットを当ててみた縁起観（相即縁起）と（性具説）みることができる。[3] 三枝充悳博士は『縁起の思想』において、刹那縁起について、「一刹那中に十二支がすべて具わり、縁起の論理的依存関係に近づいて、同時の縁起のことを刹那縁起という」[4]、と示し、新田雅章博士は端的に、「一刹那に十二縁起を構成する無明以下の十二支のすべが具されていることを教示する縁起説である」[5]、と説明している。この刹那縁起を『法華玄義』では、迹門十妙中、境妙段において、仏智の対境として七種を挙げるが、その第二、因縁境において、蔵教の縁起観として説示している。当該箇所の文を挙げれば、

一刹那の十二因縁とは、若し貪心を以て殺生するに、彼の相応の愚は是れ無明、相応の思は是れ行、相応の心は是れ識なり、有作の業を起こさば、必ず名色有り。有作の業を起こさば、必ず六入有り。彼の相応の纏（てん）は是れ取なり。彼の身口の作業は是れ有なり。此の如く諸法生ずるは是れ生、此の諸法変ずるは是れ老、此の諸法壊するは是れ死なり。[6]

とある。試みに私訳を施してみたい。

極めて短い一瞬の間の行為に十二因縁の十二支を具えている[7]とはどのようなことであるかを示せば、もし、むさぼり執着する激しい欲望の心によってあらゆる生きものを殺した場合、その瞬間の事象と結合関係にある智慧に欠けた愚かな迷いは根源的無知である無明にほかならない。その（貪心による殺生の瞬間の事象と）無明と結びついている心の動機づけ（意志作用）は、無明を原因と条件として誤った身・口・意の三業が生ずるそのはたらき[8]（行。形成力あるいは生成するはたらき）にほかならない。その（貪心による殺生の瞬間の事象と）行に伴う心[9]は、対象の認識を行う認識作用（識）にほかならない。身・口・意によってなす行為（貪心による殺生の瞬間の事象）を生ぜしめ活動させた場合、そこには必ず心身が存在する。（貪心による殺生の）身・口・意（名色・心身）によってなす行為を生ぜしめ活動させた場合、そこには必ず（物的ならびに心的存在である）眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の感覚知覚器官（六入）が存在する。貪心によって生きものを殺す瞬間の事象に伴う、対象（六境）と感覚知覚器感（六入）及び認識主観（六識）の和合は主観（感覚器感とその知覚作用。感官）と客観（対象）との接触（触）にほかならない。（貪心による殺生の瞬間の事象と）接触に伴う感受作用は認識作用の結果としての感受である。むさぼり執着する激しい欲望はとりもなおさず渇愛にほかならず（貪心による殺生の瞬間の事象と）渇愛に伴う煩悩は執着（取）にほかならず（貪心による殺生と）執着（取）に伴う身体とことばによる行為は輪廻の生存（有）にほかならないのである。以上の貪心による殺生の瞬間に無明以下、

有の縁起の依存関係があるが、この迷いが起れば輪廻に流転することによって生まれることになる。この（貪心による殺生の瞬間の）現象界の事物、存在のありのままのすがた（無明以下、生の縁起関係）が変化したならばそれは老にほかならず、この存在のありのままのすがたが変化して滅びたならばそれは死にほかならないのである。[10]

以上のように、天台智顗は刹那縁起を「貪心に導かれて殺生を働く」という例を挙げて、その行為に十二支が依存的に関係し合い、その瞬間に十二支が同時に存在しているものとして説示している。ところで、この刹那縁起について『法華玄義』では、界内（小乗仏教では、輪廻する世界は三界〈欲界・色界・無色界〉に限られていたが、大乗仏教では、輪廻する世界を三界の内部とそれを起えた世界とに二分した。前者を界内といい、後者を界外という。界内の輪廻を分段の生死といい、界外の輪廻を不思議変易の生死という）[11]の鈍根の弟子のために説く思議生滅の十二因縁の事教（因縁によって生じる差別の事相）[12]を説明する箇所において教示している。周知の通り、思議生滅の十二因縁とは、四教（蔵通別円）中、蔵教の対境として位置付けられる十二因縁の様相であり、[13]破麁顕妙の相待妙判では、「実」に対する「権」、「妙」に対する「麁」として否定される因縁境[14]である。

新田雅章博士は、以上の『法華玄義』における刹那縁起の解釈を『摩訶止観』の縁起解釈と比較して次のように述べられている。

『摩訶止観』をみると（『法華玄義』の刹那縁起解釈と）内容的に趣意を同じくすると解してよい縁起の解釈が「不生不滅不可思議」の縁起観、すなわち縁起観のうちにあってもっとも正当視されるべき縁起観としての位置に配当されている。その点について彼自身の説くところを紹介すれば、「十二因縁、十如、十境は異心のなかにあらば、これ生滅思議なり、一念心のなかにあらば、これ不生不滅不可思議なり、華厳にいわく、『十二因縁は一念の心の中にあり』と。大集にいわく、『十二因縁は一人の一念に悉く皆具足す』と。」とある。ここに紹介の

縁起観は、一念のなかに十二支のすべてが同時に具足されている関係を説く縁起観であると言う点で、「刹那」縁起そのものといってよいのではなかろうか。もしもこうした認定が許されるとすれば、「刹那」縁起の扱いをめぐって『法華玄義』と『摩訶止観』との間にズレがあることになるであろう」[15]（括孤内筆者註）

新田博士はここで『法華玄義』において、権教の爾前諸教中もっとも粗雑な教法に位置付けられる蔵教の麁法の範疇、即ち、思議生滅の十二因縁の説明箇所で説かれる刹那縁起が、『摩訶止観』では実教である円教の妙の内容を教示する不生不滅不可思議の範疇で説かれている点で『法華玄義』と『摩訶止観』の刹那縁起をめぐる解釈に違いがあることを指摘しているのである。

ところで、率直にいって、天台智顗における一刹那という表現と、一念という表現を同じ意味として捉えてよいのかという素朴な疑問が起こる。そこで、一念の意味を考察し、一刹那との違いを検証してみたい。

『摩訶止観』第九下、禅定の境を観ずる段の、諸種の禅定が発るようすを明かす項目において、十種の禅定の一つ一つを詳細に検討[16]しているが、その第八・因縁の発るようすを明かす箇所において、一念に十二因縁がそなわる真理を明かしている。即ち、

また次に、十二因縁・十如・十境が異心の中に在れば、これは生滅、思議なり、一念の心の中に在れば、これは不生不滅不可思議なり。『華厳』にいわく、「十二因縁は一念の心の中に在り」と。『大集』にいわく、「十二因縁は、一人の一念にことごとく皆な具足す」と。此れなお略を存す。もし一人の一念にことごとく皆な十界・十如・十二因縁を具足すると、すなわち称して摩訶衍の不可思議の十二因縁と為すべきのみ。[17]

とある。では、池田魯参著『詳解摩訶止観（現代語訳篇）』を手懸りに解釈に不足のある所は補いつつ現代語私訳を施してみたい。

また（蔵教・通教・別教の前三教における、下智・中智・上智の思議の因縁解釈において）[18]十二因縁や十如や十

境が別々に隔てられているという在りようは、俗界・色界・無色界の三界内において、諸法が実際に生じたり、滅したりとする事象を凡夫が現前の事象として、分析的に思いはかることのできる三蔵教の教説の理解であり、一念の心の中にある、という在りようは、三界の外に越え出でた、生身の凡夫が思いはかることのできない、諸法が生じたり、滅したりするそのものが、ありのままに生ぜず、滅せずの真実のすがた（真如）と、法身の菩薩の聖人が理解する円教の不思議不生不滅の因縁観（解釈）である。『華厳経』は、「十二因縁は、一念の心の中にある」というが、『大集経』は、「十二因縁は、一人の一念にすべてそなわっている」というが、このような表現でもまだ充分ではない。いうのであれば一人の一念に十界・十如是・十二因縁のすべてがそなわっているというべきであり、これが大乗（円教・実大乗）の思慮を超える十二因縁の理解というべきものである。[19]

以上の解釈によって、一念とは、

蔵教―思議生滅の十二因縁――――界内事教
通教―思議不生不滅の十二因縁――界内理教
別教―不思議生滅の十二因縁――――界外事教
円教―不思議不生不滅の十二因縁―界外理教

の内、円教の不生不滅不可思議の十二因縁を観ずる一念であると理解できるのである。

さらに『摩訶止観』では、この一念について、

また次に、「一念」というは、世人が一・異の定相に取著するに同じからず、一念はすなわちこれ一にあらず異にあらずして、しかも一を論ずるのみ。[20]

池田魯参著『詳解摩訶止観現代語訳篇』

また、ここでいう一念とは、世間の人が同じものか、異なるものかと限定したがるような意味合いのものでなく、

この一念は、同じものでもなく、異なるものでもない、その当体（そのもの、ありのまま、本体、諸法の本体そのもの、ありのままの本性の意）[21]を「一」といっているのである。[22]

として、一念即十二因縁の真理を明かしている。

周知の通り十二因縁とは、一応、衆生の迷いの構造を十二の因果関係において整備し表示されたものである。しかし、上記の、円教不生不滅不可思議の、一念即十二因縁が、衆生の迷いそのまま円教の悟りと、救いの一念即十二因縁とする頽廃思想ではない。

そこで、一念即十二因縁の構造を示す、円教の不生不滅不可思議の十二因縁をみてみたい。

『摩訶止観』第九下では、先の一念に、十二因縁・十如・十境を具足する真理を明らかにする前段において、最初に、思議の十二因縁解釈を声聞・縁覚・蔵教の菩薩・通教の菩薩・別教の菩薩に分け、それぞれの菩提を得る因縁観を、下智の観（声聞の菩提）、中智の観（縁覚・蔵教の菩薩・通教の菩薩の菩提）、上智の観（別教の菩薩の菩提）として説明している。そして、この後、仏の菩提を得る上上智観が不思議の十二因縁として明かされる。即ち、

若し無明を転じて仏智の明と為すは、初発心より十二因縁はこれ三仏性なりと知る。若し通じて十二因縁を観ずれば、真如の実理は是れ正因仏性なり、十二因縁を観ずる智慧は是れ了因仏性なり、十二因縁を観ずるに心が諸行を具足するは是れ縁因仏性なり。若し別して観ずれば、無明・愛・取は即ち了因仏性なり、行・有は即ち縁因仏性なり、識等の七支は即ち正因仏性なり。何を以っての故に、苦道は是れ生死なり、生死の身を変ずれば即ち法身なり、煩悩はこれ闇法なり、無明を転じて明と為す、業行は是れ縛法なり、縛を変じて解脱を成ず、三道に即して是れ三徳なればなり。性徳の因の時、不縦不横なるを三仏性と名づく。修徳の果の時、不縦不横なること世の伊字の如きを三徳涅槃と名づく。『浄名』に云く、「一切衆生は、即ち大涅槃なり、即ち是れ仏なり、即ち是れ菩提なり」と、乃ち此の意なり。是れを上上智観をもって仏の菩提を得ると名づく。[23]

試みに、池田魯参著『詳解摩訶止観現代語訳篇』を手懸りにして解釈に不足のある所は補足して私訳を施してみたい。もしも、無明（根本惑、煩悩の本体のことで、すべての煩悩の根本となるものであるが、天台では独自の意味が附与されている。三諦円融という中道実相の理を捉える智慧のさまたげとなる惑のこと）[24]を転換して、仏の中道実相理を悟る智慧を得れば、一品（一分）の無明を破り、一分の中道実相の法性の理を証得する初発心住の発する初住[25]の位に入った時から十二因縁は正因仏性（すべてのものに本来そなわる理。真如）、了因仏性（理を照らしあらわす智慧（仏性に見立てたもの）縁因（智慧）を起す縁〈条件〉となるすべての善行）[26]の三仏性であることを知ることになる。もし十二因縁の全体をひとまとめにして観ずると、十二因縁の境の真実の普遍的な道理は正因仏性であり、十二因縁を観ずる（悟る）智慧は了因仏性であり、十二因縁を観ずる心に諸行を具足するのは縁因仏性である。もし十二因縁の一々を個別に分けて三因仏性に配当して観ずると、無明（〈過去の因〉現実の苦の生存の根本原因となる根源的無知〉愛（〈現在の因〉苦楽などの感受によって対象を憎んだり熱望したりする強い欲求。渇愛）取（〈現在の因〉生じた欲求によって、対象を求めたり忌避したりする行為。執着）は了因仏性であり、行（〈過去世の因〉無明が条件となって誤った身、口、意の三業が生ずるそのはたらき）。形成のはたらき）有（〈現在世の因〉行為の結果として業が形成され、それによって輪廻の生存がある）は縁因仏性であり、識（〈現在世の果〉認識作用）名色（〈現在世の果〉名称と形態、または精神と物質、心身）六入（〈現在世の果〉心作用の成立する六つの場、眼耳鼻舌身意）触（〈現在世の果〉感官と対象との接触）受（〈現在世の果〉感受作用）生（〈未来世の果〉生まれること）老死（〈未来世の果〉無常なすがた）[27]の七支は正因仏性である。なぜ、人間の迷いが生起する経過、仕組を示す十二因縁を三因仏性とするのか、それは、煩悩と善悪の業に因って生じた苦果は、生まれかわり死にかわって、絶えることのない迷いの世界にほかならないが、流転する迷いの身を変ずるのは（すべてのものが本来の相は真実寂滅の理体であるから）すべてのものに具わる不生不滅の真理で

ある法身（正因仏性）にほかならず（生死の迷いがあるから、この生死が資成となり、生死を転じて涅槃が得られる）無明・貪欲・瞋恚の煩悩の道は迷[28]いの普遍的な真理であるが、無明を明と転換するのは般若（了因仏性）にほかならず（無明があるからこの無明を転じて明とすることができる）、煩悩に依って生じる善悪の所行は心を束縛して真実の認識ないし活動をなさしめず、苦しみの生死の世界に沈淪せしめる貪瞋癡の煩悩であるが[29]この煩悩を変ずれば、すべての煩悩より解き放たれ解脱（縁因仏性）を成就する（縛があるから、この縛を解いて解脱が得られる）わけで、この煩悩・業・苦の三道は法身・般若・解脱の三徳になるのである。以上の（円教の不生不滅不可思議の）十二因縁の意味する真理が先天的（性徳）に本性としてそなわっていて、縦と横を起えて円融して一体不離であるから三因仏性というのであり、修行によって後天的（修徳）にこの十二因縁のさとりを得たとき、世間の悉曇（しったん）文字の伊字の三点が縦にも横にも一列に並ばず相い融け合って一体不離のようであることから涅槃の三徳というのである。『維摩経』が、「生きとして生きけるものすべてが悟りの智慧、菩提を完成した境地の大涅槃[30]にほかならず、それは迷いを断ち切って得た悟りの智慧、境地、涅槃[31]にほかならない」というのは、この意である。[32]これが上上智の観によって仏の菩提を得ることになるのである。[33]（以上現代語訳）

すなわち、十二因縁の項目は、それぞれ、煩悩・業・苦の三道に割り当てられることから、十二因縁とは、衆生の苦なる生存、迷いの基本構造を十二の項目の系列を立てて示したものといえる。しかるに、この三道（煩悩・業・苦）に合わせ、むすびつけられる十二因縁も、円教の行位における、聖位の初め、中道実相の理（ことわり）を悟る初住（別教では初地）の位において、はじめて十二因縁が三因仏性・三徳にほかならない真理であることを悟るとして、この真理が不生不滅不可思議の十二因縁の境（理）と智であることを教示しているのである。

上来の検討をまとめて結論付けてみると、『法華玄義』第二下に教示された刹那の縁起とは、蔵教・通教・別教・円教の四教中、対象を分析して、差別の事相の原理を悟る蔵教（俗界・色界・無色界の三界六道の断惑証理〈見思惑

の伏断）の範疇の縁起観で、刹那という一瞬であっても時間的隔たりが存する。しかし、『摩訶止観』における、不生不滅不可思議の十二因縁を悟る一念とは、十二因縁のありのままの本性、本体、即ち、その当体を即一念としている。また、『法華玄義』第二下の刹那縁起が、蔵教、下品（最も能力や素質の劣っている）の思議生滅の立場から、十二因縁を存在論的に分析して、十二因縁による衆生の迷いの一様相を明らかにしたものであるのに対して、『摩訶止観』第九下では、円教の上上智観（仏性を開発し尽くす、円教のこの上ない絶対の智慧）によって、十二因縁の真理を正しく観察した場合、煩悩・業・苦の三道に結び合わせられる十二因縁も、翻せば、正因・了因・縁因の三因仏性と、法身・般若・解脱の三徳にほかならない実相であるとして、この三因仏性、三徳と相互に融合しあい、一体不離となっている十二因縁こそ、一念に具足する不生不滅不可思議の十二因縁であると明かしているのである。このように『法華玄義』第二下の一刹那に具す十二因縁と『摩訶止観』第九下の一念に具す十二因縁との違いを理解することができるのである。

妙楽湛然は、『法華玄義釈籤』第二下ノ八ノ左において、智顗の刹那縁起の説を解釈して、「具には止観七ノ記の如し」示しているが、宝地房証真の『法華玄義私記』第二末二十三ノ左では「第八に在り」、と示し、慧澄癡空の『法華玄義講義』第二ノ三十三ノ右では、湛然の「止観第七に記」は『摩訶止観輔行伝弘決』の八ノ二ノ二、と示し、大宝守脱の『法華玄義講述』では、同じく妙楽湛然の「止観第七に記す」を「輔行八ノ二ノ二紙」と示しているため、その輔行八ノ二ノ二紙の妙楽湛然における『摩訶止観』所説の一念の意味の解釈をみると、「一念と言うは極促の一刹那の時を謂うに非ず、善悪の業（十二因縁の三道の悪が、円教において三仏性、三徳と開会されて）成ずるを謂いて名づけて一念と為す」、と説かれていて、一刹那との混同を危惧しているようにみうけられる。したがって妙楽湛然も、一刹那と一念と意味は違うと位置付けているとみることが可能と思われる。その『摩訶止観』第八ノ二ノ二右、陰入界境の十種の止観法中、第七の助道対治の箇所をみると、「断常を計すること起らば三世の因縁をもって助け、

我人を計すること起らば、二世の因縁をもって助け、性実を計すること起らば、一念の因縁をもって助けよ」、とある。私訳を施すと、「過去・現在・未来の三世にわたって断常の二見を破し、現在と未来の二世にわたって我を破し、一念において性を破するものである」。性実とは、中村元著『佛教語大辞典』によれば、「サーンキャ学派で説く自性（根本質料因）が常住なること」、とあるので参考までに記しておく。また、『摩訶止観』で、十乗観法を明かす際、その第一の観不思議境を説明するところに有名な一念三千が説かれるが、ここで以下の様な文がある。

また、一心、前に在りて一切法、後に在りとも言わず（中略）。もし一心より一切法を生ぜば、此れ即ち是れ縦なり、若し、心、一時に一切法を含まば、此れ即ち是れ横なり。縦もまた不可なり。横もまた不可なり。祇だ心は是れ一切法にして、一切法は是れ心なり[34]」。

つまり、一心と一切法（三千世界）の、前後・本末などを論じてはならないということである。日蓮聖人の教義から示せば、『事理供養御書』の、

爾前の経々の心は、心より万法を生ず。譬へば心は大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はしからず。心すなわち大地、大地即ち草木なり。爾前の経々の心は、心すむは月のごとし、心のきよきは花のごとし、法華経はしからず。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門なり[35]」

に通ずるのが、これまで論じてきた「一念」ではないかと思うのである。日蓮聖人の、このような言及は独断ではなく、その思想の基盤が天台智顗・妙楽湛然、両大師の円教教理論にある。そして、天台・妙楽、両大師の教理に矛盾は無いのである。

（注）

（1）　新田雅章著『天台実相論の研究』五五二頁。昭和五十六年二月二十日発行。

（2）『法華玄義釈籤』第二下ノ八ノ左。『天台大師全集』（以下『天全』と略称）第二巻、一八頁。
（3）勝呂信静編『法華経の思想と展開』所収、花野充道稿「智顗の縁起論の考察」参照。二〇〇一年三月二十日発行。
（4）三枝充悳著『縁起の思想』一八頁。二〇〇〇年七月二十日発行。
（5）新田雅章著『天台実相論の研究』五四六頁。
（6）『法華玄義』第二下ノ八ノ左。『天全』第二巻、一八頁。
（7）中村元著『仏教語大辞典・縮刷版』［刹那］［刹那縁起］八二七頁参照。昭和五十六年五月二十日発行。
（8）田村芳朗・藤井教公著『法華経』上巻仏典講座7、《十二因縁》四二六―四二七頁、参照。一九九五年五月三十日再版発行。
（9）新田雅章著『摩訶止観』仏典講座25、では、心・意・識の説明において、識を「対象を個々別々に了知する側面を識と名づけて」と示しているので参照。三二三頁。一九八九年九月二十日初版発行。
（10）十二因縁の一々の意味については、田村芳朗・藤井教公共著『法華経』上、《十二因縁》四二七頁を参考とした。
（11）管野博史訳註『法華玄義』（上）（2）界内。二〇七頁、参照。一九九五年三月十六日初版発行。
（12）管野博史著『「法華玄義」入門』二五一頁、「事は、因縁によって生じる差別の事相、理はその差別相の根底にある平等な理性を指します」と示す、参照。一九九七年七月三十日初版発行。
（13）『法華玄義』第二下ノ二ノ左『天全』第二巻、五頁、「思議両種の因縁とは、利鈍の両縁の為の界内の法を弁ずるなり。『中論』に云はく、鈍根の弟子の為めに十二因縁生滅の相を説くと」。参照。
（14）『法華玄義』第二下ノ十九ノ左。『天全』第二巻、六五頁「前の三は是れ権なるが故に麁と為す、後の一は是れ実なるが故に妙と為す」。参照。
（15）新田雅章著『天台実相論の研究』五五一頁―五五二頁。
（16）池田魯参著『詳解摩訶止観研究註訳篇』一六二頁、参照。一九九七年六月十日初版発行。
（17）『摩訶止観』第九ノ三ノ四十ノ右。『天全』第五巻、三八二頁―三八三頁。

(18) 池田魯参著『詳解摩訶止観研究註訳篇』一七一頁。参照。四種の十二因縁を観ずる智については『法華玄義』第三上ノ四十九ノ右―五十ノ右。『天全』第二巻、四一三頁―四一六頁に体系的に教示されていてこの『摩訶止観』の説明と相応するので参照されたい。

(19) 池田魯参著『詳解摩訶止観現代語訳篇』六二八頁。

(20) 『摩訶止観』第九下ノ三ノ四十ノ右。『天全』第五巻、三八二頁―三八三頁

(21) 『日蓮聖人御遺文辞典・教学篇』「当体」八八九頁。平成十五年十月十三日発行。

(22) 池田魯参著『詳解摩訶止観現代語訳篇』六二九頁。

(23) 『摩訶止観』第九ノ三ノ三十六ノ右―三十六ノ左。『天全』第五巻、三七七頁―三七八頁。

(24) 新田雅章著『摩訶止観』仏典講座25。《無明》一九八頁、参照。一九八九年九月二十日発行。

(25) 『法華玄義』第五上ノ十九ノ左。『天全』第三巻、三九三頁。位妙段では、位の数を明かす項において、「二に十住の位を明かすとは、相似の十信従り能く十住の真の中智に入るを以ってなり。初発心住の発する時、三種の心発す。一に縁因の善心発し。二に了因の慧心発し、三に正因の理心発す。即ち是れ前の境・智・行妙の三種開発するなり。住とは、三徳涅槃に住するなり。縁因の心発するは、即ち是れ不可思議解脱、首楞厳定に住す。慧心発するは、即ち是れ摩訶般若、畢竟の空に住す。正因の心発するは、即ち是れ実相法身、中道第一義に住するなり」。とある。本論中の『摩訶止観』の文の意味と相応させ、初発心を初住と解釈した。

(26) 多田孝正著『法華玄義』仏典講座26,《三佛性》一八五頁、参照。昭和六十年五月一日発行。

(27) 三世両重の因果については、『法華玄義』第二下ノ五ノ右。『天全』第二巻、一一頁、境妙段思議生滅の十二因縁釈における「因は是れ縁起にして果は是れ縁生なり。即ち二は縁起、五は縁生、三は縁起、二は縁生なり（後略）」及び、管野博史訳註『法華玄義』（上）（10）二〇九頁、「無明行の二支は過去世の因であるから縁起、識・名色・六入・触・受の五支は現在世の果であるから縁生、愛・取・有の三支は現在世の因であるから縁起、生・老死の二支は未来世の果であるから縁生とそれぞれ規定される」、を参照した。

（28）多田孝正著『法華玄義』仏典講座26、《十種》三道。一八三頁、参照。

（29）中村元著『仏教語大辞典・縮刷版』［縛］一一〇一頁。参照。

（30）多田孝正著『法華玄義』仏典講座26、《涅槃》六八頁、参照。

（31）多田孝正著『法華玄義』仏典講座26、《菩提》一九七頁、参照

（32）十二因縁の三道が即三徳、三仏性となる。等の開会の論理構造は『法華玄義』第五下、迹門十妙中、第五、三法妙の類通三法の段に相対種の開会として説明があるので参照されたい。因みに、筆者は令和六年三月三十一日発行、〈現代宗教研究所所報〉『現代宗教研究』第五十八号に相対種開会について「煩悩即菩提」とは―相対種開会の内的構造、と題して考察し、掲載した。

（33）この『摩訶止観』第九下における上上智の不生不滅不可思議の十二因縁観は、『法華玄義』第二下、境妙段の不思議不生不滅の十二因縁境の説明箇所、及び、同じく『法華玄義』第三上、智妙段の四種の十二因縁の境に対して、四種の智をもって明かす項の、上上智による十二因縁観の説明箇所と相応するものであるので詳しくは参照されたい。

（34）『摩訶止観』第五ノ三ノ二十ノ左―三ノ二十四ノ右。『天全』第三巻、二七一頁―二九〇頁。

（35）『昭和定本日蓮聖人遺文』第二巻、「事理供養御書」一二六三頁。